



参加報告書 JICA 青年海外協力隊

大塚 圭 (外国語科)

第1部 派遣前訓練

1. はじめに

独立行政法人国際協力機構（以下「JICA」と記す）¹では、自分の知識や技術、経験を開発途上国で生かしたいと望む人を JICA ボランティア事業として派遣している。JICA ボランティア事業は青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、日系社会青年ボランティア、日系社会シニア・ボランティアの4種類のボランティア事業の総称であり、1965年に青年海外協力隊が発足して以降、日本の ODA²事業として開発途上国の要請に基づき、多くのボランティアを派遣してきた。国内で年2回募集（春・秋）を行い、選考（語学、技術、面接、健康診断）を経て、技術・能力を有する人材を原則2年間派遣する³。また、青年海外協力隊及び日系社会青年海外協力隊には、現職教員特別参加制度があり、公立学校、国立大学附属学校、公立大学附属学校、私立学校の教員が身分を保持したまま参加することができ、派遣期間と訓練をあわせて2年間となる（春募集期のみ）。

筆者は、本校の長期海外研修制度と JICA の現職教員特別参加制度を活用して、2018年4月から2020年3月まで青年海外協力隊に参加した。本稿では、今後の教育活動に活かすことを目的に、青年海外協力隊への応募からキルギス共和国（以下「キルギス」と記す）での活動、そして帰国後の研修までを報告する。

2. 応募から派遣までの流れ

まず、2017年2月に JICA のウェブサイトにて要請情報及び応募に必要な書類が掲載され、4月に希望の職種や派遣国を選択し、応募書類を作成して文部科学省に送付した。その後、文部科学省から JICA への推薦があり、6月に第1次選考の結果が通知された（現職教員特別参加制度では1次選考で職種別試験が免除される）。6月には、JICA における2次選考（個人面接、人物・技術面接）があり、8月に最終的に青少年活動（英語教育）と

¹ JICA (Japan International Cooperation Agency) は、政府開発援助 (ODA) のうち、国際機関への資金の拠出を除く、二国間援助の3つの手法、「技術協力」「有償資金協力」「無償資金協力」を一元的に担っている。世界最大規模の二国間援助機関である JICA は、約100カ所にのぼる海外拠点を窓口として、世界150以上の国と地域で事業を展開している。

² ODA (Official Development Assistance) は、開発途上国の経済や社会の発展、国民の福祉向上や民生の安定に協力するために行われる先進国などの政府ベースの経済協力の中心を成すものである。

³ 2018年秋募集以降、新しい制度になり、JICA ボランティアの総称を「JICA 海外協力隊」と変更し、従来の年齢による区分を改め、幅広い職種で応募可能な案件を「一般案件」、一定以上の経験・技能等が必要な案件を「シニア案件」とする案件による区分とした。また、現職参加者に対する人件費補てん制度は廃止され、現職で参加する海外協力隊員が所属する機関に対し現職参加促進費を支給することになった。

(<https://www.jica.go.jp/volunteer/concept/>)

してキルギスのビシュケク市教育局への派遣が決定した。

3. 派遣前訓練

2018年4月5日から6月13日までの70日間、長野県の駒ヶ根訓練所で派遣前訓練が行われた。訓練の目的は、開発途上国で活動を行うために必要な国際協力についての知識や語学力、また、規律正しい生活を送ることにより、公人としての心構えや健康管理について学ぶことである。訓練中は、約200人のJICAボランティア候補者が合宿制で共同生活をする。訓練内容は、任地で使用する語学学習（訓練言語：キルギス語）をはじめ、目標管理、コミュニケーション技法・調査手法など活動に必要な資質や能力を養うものであった。また、皇太子殿下にご接見を賜る機会や河野外務大臣（当時）主催 JICA ボランティアとの懇談会などの特別行事なども催された。約200人の候補者との共同生活、朝から晩までタイトなスケジュール、大自然に囲まれた健康な生活、とても貴重な経験になった70日間であった。そして、1か月ほど渡航のための準備期間が設けられ、2018年7月8日にキルギスに出発した。



修了式



河野外務大臣主催の懇談会

【ある1日のスケジュール】

6 : 3 0	朝の集い（国旗掲揚・ラジオ体操・体力維持活動）
7 : 2 0	朝食
8 : 4 5 ~ 1 1 : 4 0	語学授業（キルギス語）
1 1 : 4 0	昼食
1 3 : 0 0 ~ 1 4 : 5 0	語学授業（キルギス語）
1 5 : 1 0 ~ 1 7 : 0 0	海外における安全対策
1 8 : 0 0	夕食
1 9 : 0 0 ~	語学自習
2 3 : 0 0	消灯

第2部 キルギスでの活動①：活動目標の設定

1. キルギス 概要

キルギスは、ユーラシア大陸のほぼ中央に位置する旧ソビエト連邦の共和制国家である。中央アジアのスイスと呼ばれ、美しい山々や渓谷などの豊かな自然が見どころである。国土の93%が標高1500m以上、40%が3000mを超える山々に囲まれていて、琵琶湖の9倍の大きさを誇る中央アジアの真珠と呼ばれるイシクル湖がある。面積は日本の約半分ほどで、人口は約620万人である。首都はビシュケクで約90万の人々が暮らしている。民族の構成は、約70%はキルギス人だが、ウズベク人やロシア人も多い。言語はキルギス語が国語、ロシア語が公用語になっているため、多くの人々は二言語を併用している。主な宗教はイスラム教のスニ派であるが、ロシア系の人々は、ロシア正教会を信仰している。キルギスの主な産業は、農業や畜産業でGDPの約3割を占めており、その他は金採掘などの鉱業である⁴。キルギス共和国憲法第2条第1項には、「キルギスタン国民はキルギス共和国の主権の担い手であり、キルギス共和国における国家権力の唯一の源泉である」と国民主権が明確に記されており、キルギスは中央アジアで比較的民主化が進んだ国である。

中央アジア⁵



キルギス⁶



2. 現地研修

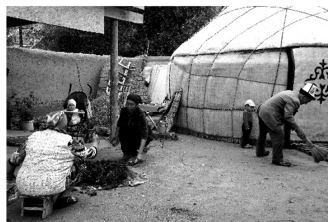
7月9日から8月14日の日程でブリーフィング・オリエンテーションや表敬訪問（在キルギス日本大使館・財務省など）、現地語学訓練、村ホームステイなどの現地研修が行われた。現地研修の一番の目的は語学訓練である。派遣前訓練で学習したキルギス語に加えて公用語であるロシア語も学習する。基本的には、語学学校で午前中はグループ授業、午後は個別授業で学ぶ。1週間に2回ほど午後はロシア語の授業になる。最終日には、配属

⁴ キルギス基礎データ（外務省）<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kyrgyz/data.html>

⁵ https://www.jetro.go.jp/ext_images/biz/areareports/2018/6247f99dd70ef695/g01.jpg

⁶ https://www.travel-zentech.jp/asia/Kyrgyzstan/Kyrgyzstan_map.jp.gif

先での活動を現地語で説明する語学発表会が実施された。また、3日間の村ホームステイでは、学習してきた語学を日常生活の中で使用するだけでなく、キルギスの人々の生活を体験する機会になった。そして、現地研修終了後、8月27日にビシュケク市教育局（配属先）に赴任した。



村ホームステイ

3. ビシュケク市教育局

ビシュケク市教育局は、ビシュケク市内の学校（小中高等学校一貫校）97校と幼稚園85園を管轄している。ビシュケク市内の学校のカリキュラム実施状況や、生徒の学習到達度を把握することが主な役割である。また、教師を対象としたセミナーを定期的に開催するなど、ビシュケク市内の教育における質的向上を目指している。ビシュケク市教育局は、教科別や対象生徒別に部署が分かれている。外国語教育課、数学教育課、理科教育課、社会科教育課、道徳教育課などの教科別、また、低学年クラスや幼児教育を担当する校種別などの部署がある。筆者は、外国語教育課に所属し、活動の主な目的は、「ビシュケク市内の学校における英語教育の質的向上」に貢献することである。また、筆者の他に数学教育課と道徳教育課に2名の新隊員が同時に赴任した。学校に派遣される隊員と違い、教師を対象とした活動が多く、生徒と接する機会は少ない。新規の隊員ということもあり、決められた活動があるわけではなく、ビシュケク市内の学校教育の実態を把握して、それをもとに活動を計画していかなければならない。基本的には、カウンターパート⁷と話し合い、協力を得ながら、「英語教育の質的向上」のための活動を実施していくことが目標となる。



ビシュケク市教育局



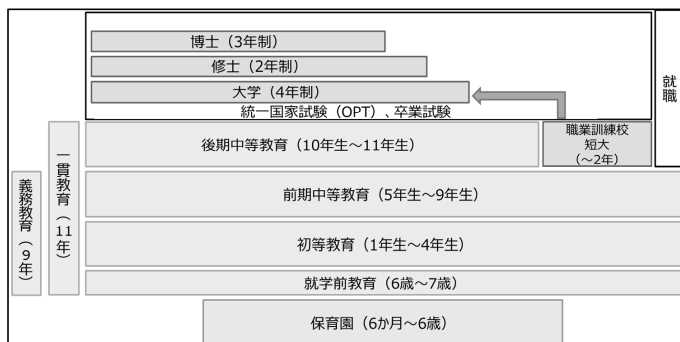
カウンターパート（右手前）

⁷ 現地で受け入れを担当するキルギス人パートナーの呼称。

4. 活動背景

(1) 教育システム

キルギスの学校は、1年生から11年生（日本の高校2年生）までの小中高一貫教育である。ただし、6歳で0年生として就学前教育を受けるため、基本的に日本と同じ小学校から高校までの12年間の初等・中等教育となる。9年生までが義務教育で、大学進学を希望する生徒たちは10年生、11年生に進学する。大学への進学を希望する11年生は、OPT と呼ばれる統一国家試験を受験し、その点数によって大学への進学が決定する。受験科目は、キルギス語またはロシア語や数学、歴史が必修であり、外国語などは選択科目となる。首都のビシュケクでは生徒数に対して学校が足りていないという現状もあり、2部制の学校が多く、生徒たちは8時から13時または13時から18時のどちらかの時間帯に登校して学習する。授業は1コマ45分で6時間の時間割になっている。キルギスの学校は、特定分野（英語や数学など）に力を入れている Гимназия、職業訓練（コンピューター技術や自動車整備など）を含む Лицей、就学前教育も併設されている Учебно-воспитательный комплекс (УВК)、一般的な学校である Средняя школа に分かれている。また、キルギス語学校、ロシア語学校、キルギス語・ロシア語学校という3種類の学校があり、キルギス語・ロシア語学校では、キルギス語クラスとロシア語クラスに分かれ、授業が行われている。



キルギスの教育システム⁸

(2) 英語教育

近年、キルギスでは、教科書の改訂や授業時間の増加などを含めて英語教育に力を入れている。小学校の3年生から英語を教科として学び、3年生と4年生、8年生から11年生は週2時間の授業である。その他、5年生は週5時間、6年生は週4時間、7年生は週3時間となっている。国定の教科書は、3年生から7年生までは新しく改訂されているが、

⁸ 過去にキルギスで活動していた隊員が作成した。

8年生から11年生は、改訂されておらず、以前の教科書を使用している。また、オックスフォード出版などの教材を使用している学校もある。新しい国定の教科書は、4技能をバランスよく学ぶためにアクティビティを中心に作られていてコミュニケーション重視になっており、教師の指導書やワークブックも付属している。1クラスは約35～40人だが、英語の授業では、基本的に2つのクラスに分けられ、15～20人の少人数で授業が行われている。大学入試に英語が必修ではないため、高学年では英語の授業数が少なくなる傾向がある。

(3) 英語教師

教師になるための条件は大学卒業証書のためのため、英語を専門として学んでいなくても英語教師になることができる。基本的に各学校での採用は、校長の権限である。また、多くの教師は1週間に約25～30コマの授業を教えているが、教員の給料は他の職種に比べても非常に安いのが現状である。教育は、伝統的に女性の仕事と考えられていたり、給料が安いと、男性が家族を養うことができなかつたりということにより、キルギスの学校では、体育などの科目を除いてほとんどの教師は女性である。

5. 活動目標の設定

(1) 授業見学

まず、キルギスの英語教育事情を把握するために各学校を訪問し、授業を見学した。以下は、10校34時間の英語の授業見学による所見である。

英語の授業見学による所見 (10校 34時間)					
英語教育システム	授業内容	教師	生徒	教材	
+ 5年生は、週5時間、6年生は週4時間の英語授業	+ 4技能をバランスよく教えている	+ 基本的に英語で授業(適宜母語を使用)	+ 生徒はとても積極的である	+ 今年度から教科書が改訂(3、4、6年生)	
+ 1クラスの生徒数は約15～20人で少人数クラス	+ コミュニカティブアプローチが中心である	+ 生徒との対話形式で授業を進めている	+ キルギス語とロシア語を習っているため外国語を話すことに慣れている	+ 5年生は昨年度に改訂	
+ 土曜日の教員研修	- 低学年でかなり難しい文法事項を学ぶ	+ 指導案をもとに授業を行っている	+ しっかりとした規律がある	+ 教科書には付属のワークブックがある	
- 3～4・7～11年生は週に2時間の英語授業	- 高学年につれて、翻訳をする授業が多くなる	- 生徒主体のペア・グループワークが少ない	- 授業時間内の教室の出入りが頻繁	- 7～11年生の生徒は以前の教科書を使用	
- 大学入試に英語が必修ではない(選択科目として)	- 教科書の内容が1年間では終わらない	- 理解していない生徒に対する配慮が少ない	- 辞書を持っていない生徒が多い	+ 国が指定している教科書を基本的に使用	
- 音声機器やプロジェクターなどの設備が学校によって異なる	- 高学年の英語の教科書は内容が難解で情報古い	+ 基本的には教師が主導する授業形態	- 発言をする生徒が限られていて、参加していない生徒もいる	+ 教科書には教師用の指導書がある(指導書だけで教えることができるものではない)	
+ 3年生から教科として英語を学び始める	+ 一文法項目を中心とした授業構成	+ 発表形式の活動はあるが、教師と生徒で行うことが多い	- 高学年につれて、モチベーションが低くなる	+ オックスフォード出版の教材を使用している学校もある	
		+ 毎回授業の最後に成績をつける	+ 一他生徒の発表をあまり聞かない		

+ : キルギスの英語教育におけるプラスの側面

- : キルギスの英語教育におけるマイナスの側面

+ - : 現時点では判断できない

キルギスの英語教育に関する所見



英語授業の様子

(2) アンケート調査

キルギスの英語教育の現状を把握するために英語教師 102 名（ビシュケク：82 名、
地方都市：20 名）に以下のアンケートを実施した。

Questionnaire	
Your school name ()	
1. How many years have you been teaching English?	() years
2. What grades are you teaching now?	() grade
3. When you teach English, which skills do you usually focus on? (Circle all that apply.) a. speaking b. listening c. reading d. writing e. all skills	
4. Do you speak only English in the class? (Put a circle below) Yes. No.	
5. How many percent of the students in the class do you think like studying English? I think () percent of the students in the class like studying English.	
6. Are there any particular efforts you are making in the class? If yes, please describe them below.	
7. Are there any difficulties with teaching English? If yes, please describe them below.	
Thank you for your cooperation!	

(3) アンケート分析

1. あなたは英語を何年間、教えていますか。

1 年から 3 年	4 年から 6 年	7 年から 9 年	1 0 年以上
4 9 人	1 3 人	3 人	3 7 人

英語教師の約半数は、1 年から 3 年の経験を持つ若い教師であった。また、1 0 年間以上の経験を持つ教師も 3 7 人と高い割合であった。しかし、4 年から 9 年の経験を持つ中間層が少ない。キルギスでは、教師は女性の仕事であるという概念があり、大学卒業後に教師として仕事を始めるが、結婚後に退職して子育てが落ち着いたら再び復職するという女性教師が多いため、極端に中間層（4～9 年）の経験を持つ教師が少ないのではないかと考える。

2. あなたはどの学年を教えてください。（複数回答可）

2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生
2 人	4 4 人	4 1 人	4 5 人	4 7 人
7 年生	8 年生	9 年生	1 0 年生	1 1 年生
4 2 人	4 3 人	3 9 人	2 7 人	2 9 人

今回のアンケートでは、高学年を教えている英語教師が他の学年に比べると少なかった。高学年になるにつれて英語の授業数が少ないことが要因だと考えられる。また、高学年になると、大学入試に英語は必修ではないため、生徒たちのモチベーションが下がる傾向がある。その上、高学年の教科書は改訂されていないこともあり、教えるのが難しい学年という認識を持つ教師が多いのかもしれない。キルギスの学校は小中高一貫教育のため、一人ひとりの英語教師の教えている学年は幅広く、小学校（1～4 年生）や中学校（5～9 年生）、高校（1 0～1 1 年生）のすべてを教えていることもある。

3. あなたは英語の 4 技能の中で何を中心に教えていますか。（複数回答可）

スピーキング	リスニング	リーディング	ライティング	4 技能すべて
1 4 人	1 人	1 1 人	1 0 人	8 3 人

キルギスの英語教師は、英語の 4 技能（話すこと・聞くこと・読むこと・書くこと）をバランスよく教えることを目標にしていることがわかる。3 年生から 7 年生までの教科書がアクティビティを中心としたコミュニケーション活動を重視していることも影響している

と推測できる。また、アンケートでは、英語の4技能の中でリスニングの項目を選択する教師が少なかった。リスニング指導が他の技能に比べるとおろそかになっている、または、4技能の中でリスニングの指導について悩んでいる英語教師が多いのではないかと考える。

4. あなたは授業中、英語だけで授業をしていますか。

はい	いいえ
32人	69人

英語のみで授業をしている教師は32人で、学校のレベルや学年によっても授業における英語の使用頻度は異なるが、基本的にはキルギス語・ロシア語を併用しているようである。生徒が理解していない部分をキルギス語・ロシア語で説明したり、活動の指示のみを英語で伝えたりと各教師によって母語と英語の使い分けには多少の違いがあると考ええる。

5. どれくらいの生徒が英語を好きだと感じていると思いますか。

0%-10%	11%-20%	21%-30%	31%-40%	41%-50%
0人	2人	1人	5人	15人
51%-60%	61%-70%	71%-80%	81%-90%	91%-100%
19人	20人	26人	9人	6人

キルギスでは、比較的生徒が英語を好きであると考えている教師が多いようである。回答は、71%～80%、61%～70%、51%～60%の順に続くので、大半の生徒は、英語に興味を持ち、積極的に学ぼうとしている様子を理解することができる。

6. 授業で工夫していることがあれば書いてください。

視聴覚教材	教材	教授法	モチベーション	教授言語
18人	2人	44人	7人	6人

半数以上の英語教師が教授法について回答していた。特に、「コミュニケーション重視の授業をするように心がけている」というものが多く、コミュニカティブ・アプローチを意識していることが伺える。日本でもコミュニケーション重視の授業への転換が叫ばれているが、キルギスの英語教師も同じような価値観を持っていることを理解することができる。また、ビシュケクと地方を比較すると、教授法について回答している教師が多いのは共通しているが、視聴覚教材については大きな違いがあった。ビシュケクの多くの英語教師が

視聴覚教材を使用している一方で、地方では、視聴覚教材について回答している教師が少ない。都市と地方では、視聴覚教材を使用する設備などに格差があるのではないかと推測できる。

7. 英語の授業において、課題があれば書いてください。

設備	教材	英語の知識	生徒指導	カリキュラム
18人	17人	10人	34人	14人

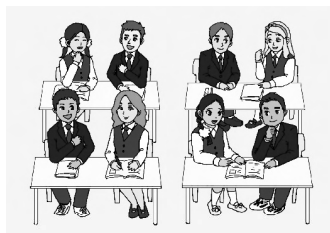
多くの教師が「生徒のモチベーションが低い」などの生徒に関する課題を回答していた。生徒のモチベーションの低さについて回答している教師が多いということは、教師が主導する授業形態なのではないかと推測することができる。一斉授業のような教師主導の形態は、モチベーションの高い生徒が多い場合は授業として成り立つが、そうではない場合には、教師が生徒のモチベーションを高めるようにしていかなければならない。キルギスの英語教師は、基本的に前述したようにコミュニケーション重視の授業を目指しているが、それは教師主導の段階であり、生徒主体の活動ではないと考える。教師と生徒との対話はあるが、生徒同士での学び合いが少ないのかもしれない。また、ビシュケクの英語教師は、設備の不足を挙げるが、地方の英語教師は、教材の不足について回答している。地方では生徒にとって最低限必要な教材が不足していることを示唆している。

(4) 授業見学及びアンケート結果による考察

キルギスの英語教師は、基本的に英語で生徒とコミュニケーション対話を中心に授業を行っている。そのため、キルギスの英語教育は非常にレベルが高いと考える。しかし、伝統的に教師が主導する授業形態のため、生徒主体のペア・グループワークが少ないように感じる。対話や発表形式の活動はあるが、対話は教師と生徒で行い、発表は個人活動で行うことが多い。そのため、授業内で一人ひとりが英語で話す時間は限られている。例えば、ペアの生徒が前に出てきて教師の前で会話を発表する形やグループの話し合いの後に一人の代表者がグループでまとめた意見を教師の前で発表する形などがある。その場合、他の生徒は発表を見ているだけでコミュニケーション活動に参加していない。生徒主体のペア・グループワークとは、授業内で生徒全員がお互いに英語を練習する機会を持ち、定着度を確認したり、お互いのグループ同士で意見を交換したりする活動を意味する。教師に発表を見てもらうことが目的ではなく、生徒同士の英語によるコミュニケーション活動を通してお互いに学ぶための活動である。

上記のようなキルギスの英語教育における現状を踏まえて、「生徒主体のペア・グループワークの普及」を活動目標として設定することにした。キルギスの生徒は、キルギス語とロシア語の二言語を併用し、積極的に外国語を話すことに慣れているため、授業内で生徒

主体のペア・グループワークを取り入れることで、生徒の英語を話す時間が自然に増えて、今まで以上に英語能力の向上を期待できる。



生徒主体のペア・グループワーク（イメージ）

第3部 キルギスでの活動②：生徒主体のペア・グループワークの普及

「生徒主体のペア・グループワークの普及」を目的に「各学校でのワークショップ」「活動集の発行」「パイロットスクールプロジェクト」という3つの活動を実施した。ワークショップでペア・グループワークについての基礎を学び、活動集を使用して学んだことを応用し、パイロットスクールプロジェクトで一人ひとりの英語教師が発展的にペア・グループワーク活動を実践できることを目標に設定した。

1. 各学校でのワークショップ

（1）概要

生徒主体のペア・グループワークの普及を目的にビシュケク市内の各学校で英語教師を対象にワークショップを実施した。午前・午後に1校ずつ訪問し、約1時間30分のワークショップである。各学校の英語教師は、3000人規模の学校では15～20人、500人規模の学校では1～2人在籍している。参加人数は、各学校によって異なり、15人の参加のときもあれば、2人のときもある。1か月ごとにカウンターパートが訪問校について予定表を作成し、各学校に送付して日程を調整する。ワークショップの内容は、基本的に2つのパートに分かれており、最初の45分は、生徒主体のペア・グループワークの理論（活動手順やメリットなど）を中心に説明して、後半の45分は、キルギスの教科書を使用して3つのアクティビティ（生徒が一斉に活動するペア・グループワークと生徒が自由に教室内を移動する活動）を体験してもらうプログラムである。最後に、ワークショップの修了証明書を渡し、キルギスの文化でもあるお茶の時間（チャイ）で意見交換をする。この各校でのワークショップは、多くの英語教師と接することができ、キルギスの英語教育事情を把握する機会になった。

- ・ 期間：2019年2月～10月
- ・ 実施校：91校（ビシュケク市内の特別支援学校などを除くすべての学校）
- ・ 参加者：英語教師516名⁹
- ・ 内容：生徒主体のペア・グループワークの理論及び体験
- ・ 修了証明書の発行¹⁰：JICAの現地業務費¹¹を申請



各学校でのワークショップ

（2）フィードバック

生徒主体のペア・グループワークについて、キルギスの英語教師からのフィードバックは次のようなものがあった。

- ・ 生徒が英語を話す時間が増える。
- ・ すべての生徒が英語を話す機会を持つことができる。
- ・ シンプルな活動でどの文法事項にも応用できる。
- ・ 英語を苦手とする生徒が他の生徒に質問することができる。
- ・ クラスがうるさくなってしまう。
- ・ 生徒全員に活動をしてもらうことが難しい。
- ・ 生徒の評価が難しい。
- ・ 生徒の間違いを訂正できない。
- ・ スピーキング以外の活動はペア・グループワークで可能なのか。
- ・ テスト作成時に実践した活動を反映することが難しい。
- ・ 異なる英語力の生徒たちが一緒にペア・グループワークをするのは効果的ではない。

特に「教室がうるさくなってしまう、他の先生に迷惑をかけてしまう」や「評価するのが難しい」、「生徒の間違いを訂正できない」、「生徒の英語力のレベルが違いすぎる」などの意見は多かった。キルギスの学校では、静かなクラスが良い授業であるという認識や

⁹ ビシュケク市内の英語教師は約600人である。

¹⁰ 修了証明書の発行はキルギスの文化として教師の参加におけるモチベーションを高める効果があると考えられる。

¹¹ 現地業務費は、受入国配属機関が負担することのできない活動経費をJICAが支援する制度である。

毎授業ごとに生徒を5段階で評価する習慣がある。教師の役割は、生徒の間違いを直すことであると考えている教師も多い。また、小学生から英語のコース（日本での塾と同じ）に通っている生徒と学校の英語の授業しか受けていない生徒の英語力には大きな差があることも事実である。このような文化的な要素や英語教育の現状を含めてキルギスの教育文化に受け入れやすい生徒主体のペア・グループワークを試行錯誤していく必要があると実感した。一方で、キルギスの教師は、各学校で指導案や教材を共有し、同一の授業をする傾向があるため、ある指導法が一度受け入れられると、多くの教師がそれを一斉に活用するのではないかという可能性も感じた。

（3）修了証明書

キルギスにおけるセミナーの修了証明書は、文化のようなものであり、一般的にどのセミナーでも配布されているものである。修了証明書は義務ではないが、配布することによって2つの利点があったと感じている。1つは、キルギスの英語教師のモチベーションを高める手段になったことである。キルギスの英語教師にとって、修了証明書を受け取ることが一つのステータスになっており、修了証明書のないセミナーを軽視する傾向がある。もう1つは、各学校でのワークショップがビシュケク市教育局の活動の1つと認識されたことである。修了証明書には、教育局長の名前も記載されており、個人ではなくビシュケク市教育局の活動になったことが英語教師の参加を促す一つの理由になったと考える。



ワークショップ終了後に記念撮影



（キルギス語）

修了証明書



（ロシア語）

(4) 成果

ビシケク市内の全ての学校でワークショップを実施できたことは大きな成果である。最初は各学校に10人の英語教師が在籍している場合、3～4人ぐらいの参加だった。しかし、時が経つにつれて、参加が義務であると考えてくれた教師も多くなり、校長が全員参加できるように時間割を変更するなど、参加人数は増えていった。生徒主体のペア・グループワークの普及ということだけではなく、多くの英語教師と関係性を築くことができたことが大きな成果であり、次の段階につながる機会になったと考える。キルギスの教育文化を肌で感じ、キルギスで受け入れやすい生徒主体のペア・グループワークを実践していくための第一歩になった。

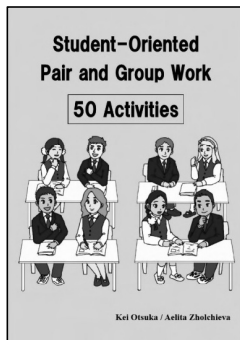
スケジュール

Student-Oriented Pair and Group Work (Workshop)											
No.	Date	Teacher	School	No.	Date	Teacher	School	No.	Date	Teacher	School
1	Feb. 5	4	AYBK mr№6	32	Apr.4	5	com№19	63	Jun.7	1	com№80
2	Feb. 5	10	mr№28	33	Apr.4	3	BFH№1	64	Jun.12	5	mr№24
3	Feb. 7	6	mr№4	34	Apr.5	6	com№25	65	Sep.11	8	com№1
4	Feb. 7	5	com№11	35	Apr.5	4	mr№74	66	Sep.11	7	com№32
5	Feb. 11	4	com№2	36	Apr.16	7	com№27	67	Sep.12	3	mr№33
6	Feb. 11	2	com№7	37	Apr.16	3	com№10	68	Sep.12	2	com№35
7	Feb. 13	7	com№3	38	Apr.18	4	GC№26	69	Sep.13	8	mr№37
8	Feb. 13	3	com№14	39	Apr.18	4	mr№17	70	Sep.16	8	com№93
9	Feb. 15	6	com№15	40	Apr.19	4	YBK mr№12	71	Sep.16	1	HCIII№90
10	Feb. 15	6	com№18	41	Apr.19	9	33/IL№65	72	Sep.16	6	com№96
11	Feb. 20	3	com№16	42	Apr.22	4	mr№63	73	Sep.17	6	com№46
12	Feb. 20	5	com№21	43	Apr.22	5	com№71	74	Sep.17	7	com№86
13	Feb. 26	5	com№40	44	Apr.24	5	com№52	75	Sep.18	4	com№47
14	Feb. 26	5	com№44	45	Apr.24	2	com№53	76	Sep.18	9	com№55
15	Feb. 28	4	mr№39	46	Apr.29	5	YBK mr№95	77	Sep.19	9	YBK mr№66
16	Feb. 28	5	com№56	47	Apr.29	10	mr№72	78	Sep.19	4	com№60
17	Mar. 4	4	mr№91	48	Apr.30	5	com№49	79	Sep.20	3	com№41
18	Mar. 4	8	com№73	49	Apr.30	7	com№54	80	Sep.20	8	YBK mr№67
19	Mar. 6	4	com№8	50	May.14	8	com№88	81	Sep.23	2	mr№76
20	Mar. 6	6	YBK mr№9	51	May.14	2	HCIII№92	82	Sep.23	11	YBK mr№58
21	Mar.11	4	com№57	52	May.15	2	mr№75	83	Sep.24	4	com№50
22	Mar.11	5	com№58	53	May.15	7	mr№78	84	Sep.24	7	com№83
23	Mar.14	8	AΦMmr№61	54	May.16	3	com№59	85	Oct.8	3	HCIII№43
24	Mar.14	4	mr№48	55	May.16	9	com№84	86	Oct.8	5	com№94
25	Mar.19	5	mr№62	56	May.17	6	mr№31	87	Oct.9	3	com№85
26	Mar.19	5	mr№64	57	May.17	7	com№42	88	Oct.9	6	com№89
27	Mar.25	14	mr№13	58	May.20	5	YBK mr№68	89	Oct.10	10	com№81
28	Mar.25	9	YBK mr№70	59	May.20	6	com№77	90	Oct.10	9	com№87
29	Mar.27	4	mr№51	60	Jun.4	9	mr№29	91	Oct.14	15	com№82
30	Mar.27	6	com№45	61	Jun.4	5	mr№20				
31	Apr.2	8	YBK mr№69	62	Jun.7	7	com№79				

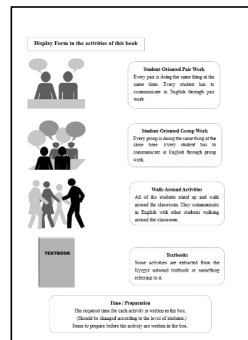
2. 生徒主体のペア・グループワークを題材とした活動集の発行

(1) 背景

近年、キルギスでは、教科書の改訂や授業時間の増加などを含めて英語教育に力を入れているが、キルギスの英語教師が使用できる副教材はほとんどない。少数ではあるが、アメリカやイギリスで出版されている英語教育の教材を使用している学校もある。しかし、欧米で出版されている英語の副教材は、英語を第二言語として学んでいる生徒を対象にしていたり、キルギスの教育文化に沿った内容ではなかったりして、キルギスの英語教師が使用するのが難しい場合も多い。また、多くの教師は1週間に約25～30コマの授業を教えているため、授業を準備する時間も限られている。参考にする副教材もなく、時間も限られているため、前述の生徒主体のペア・グループワークをテーマにしたワークショップでの経験を授業で実践するのは難しいのが現状であった。そのため、生徒主体のペア・グループワークの普及を目的にキルギスの英語教師が使用できるアクティビティ集の発行を活動の一つの目標に設定した。



表紙

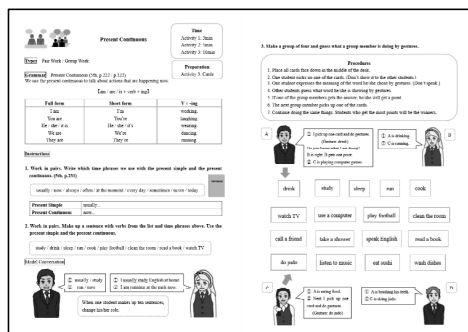


活動集の使い方

(2) 内容

活動集には、生徒主体のペア・グループワークを実践する50個のアクティビティを収録した。アクティビティは、文法項目をテーマにした活動(32個)と一般的にどの文法項目にも応用できる活動(18個)に分かれている。その他、生徒主体のペア・グループワークの説明や活動の進め方なども含まれている。1つの活動に必要な時間や準備するものなども明記されていて、キルギスの英語教師がすぐに活用できるように工夫している。

また、活動集の発行については、教育科学省での予算及びJICAキルギス事務所の現地業務費を申請することにした。また、教科書や学術系の出版物をダウンロードできるサイトに申請をし、キルギスの英語教師が自由に活動集を使用できるようにした。



現在進行形のペア・グループワーク

(3) 教育科学省の予算での発行

教育科学省では、年度ごとに教育現場で使用する書籍について予算が確保されているため、生徒主体のペア・グループワークを題材とした活動集を副教材として申請の手続きをした。以下は、申請に必要な書類である。

- ・出版物についての論評（配属先及び外部機関）
- ・教育局長の承認
- ・発行許可書（Academy of Education という学術出版物を取り扱う機関が発行）
- ・推薦状（キルギスの英語教師から10名程度の承認）
- ・履歴書（顔写真含む）及び注釈
- ・剽窃についての検査書

これらの書類を教育科学省に提出して、委員会での承認を得ることになった。任期中には間に合わなかったが、2020年に発行の予定である¹²。



教育科学省



打ち合わせ

¹² 教育科学省での予算における発行については、引き続きカウンターパートが手続きを進めている。

(4) JICA 現地業務費での発行

教育科学省の予算を申請する一方で、JICA の現地業務費を活用して活動集を発行した。現地業務費で発行した活動集は、各地域の教育局支部を通して、ビシュケク市内のすべての学校に一部または二部を配布した。各学校の図書館に保管され、英語教師が必要な時に使用するようになっている。また、ペア・グループワークの活動で使用する卓上ベルが好評であったため、活動集とともに、各校に1個ずつ配布した。



教材集の発行

(5) Lib.kg で公開

各学校の英語教師が自由に必要な時に活動集を使用できるように、Lib.kg というサイトにダウンロードできるようにした。このサイトは、キルギスの国定の教科書を無料でダウンロードできるだけでなく、教育分野の書籍や論文を閲覧することができる。また、許可を得ることにより、誰でも自由に教材を共有することができる。そのため、より多くの英語教師に使用してもらうことを目的に、活動集を Lib.kg のサイトに載せることにした。



Lib.kg のサイト

(6) 今後の予定

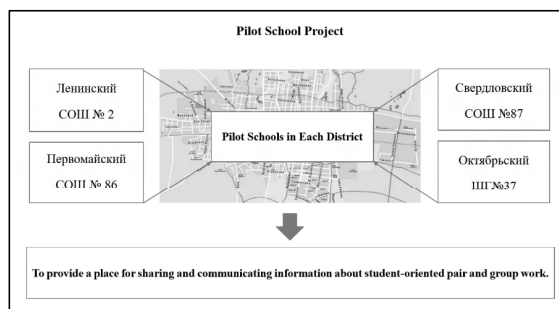
生徒主体のペア・グループワークを題材とした活動集を現地業務費で発行するとともに、Lib.kg のサイトで公開することはできたが、2020年3月現在、教育科学省の予算で活

動集は発行されていない。教育科学省から発行することによって、ビシュケクだけでなくキルギスのすべての学校に活動集を配布することができるため、多くのキルギスの英語教師に生徒主体のペア・グループワークを題材とした活動集を使用してもらえることを期待している。

3. パイロットスクールプロジェクト

(1) 概要

パイロットスクールプロジェクトは、ビシュケク市内の4地域から各1校を選択し¹³、生徒主体のペア・グループワークの活動における情報を共有・発信する場を作ることとしている。また、その過程で一人ひとりの英語教師がペア・グループワークの活動において、生徒の学年や英語力によって発展的にアクティビティを実践できるようになることを目指している。筆者は、2019年11月から1週間に1回、パイロットスクールを訪問し、授業見学や模擬授業などを行った。さらに、他校の英語教師を招待してセミナーを実施し、パイロットスクールの英語教師が講師として模擬授業を実践する機会を設けた。



パイロットスクールプロジェクト

(2) 授業見学

まず、各学校の現状を把握するために授業見学を行った。ワークショップやセミナーで活動目標について紹介していたため、授業見学の際には、積極的にペア・グループワークを取り入れている英語教師が多かった。しかし、ペア・グループワークに慣れていない教師も多く、生徒への指示が明確でなかったり、活動内容よりもアクティビティを実践することが目的になっていたりする授業もあった。ペア・グループワークの方法論だけでなく、その活動の意義や目的などをしっかりと伝えていくことの重要性を感じた。

¹³ ビシュケク市内は、Ленинский、Свердловский、Первомайский、Октябрьский の4地区に分かれている。



ペアワーク



グループワーク

(3) 模擬授業

授業を数回見学した後に模擬授業を実施した。模擬授業では、実際に英語の授業でペア・グループワークを実践するだけでなく、生徒同士で学ぶことの意味を理解できる活動を取り入れた。45分授業の中で、前半はペア・グループワークの方法を知ることができる活動を実践し、後半は、生徒同士がお互いの意見を聞き、多様な視点を持つことができるように努めた。1か月の間、各校で模擬授業を実践するとともに、英語教師に授業の見学をしてもらい、意見交換をしながらキルギスの教育文化に受け入れやすいペア・グループワークの活動を模索していった。



模擬授業

(4) ティームティーチング

模擬授業でペア・グループワークの有用性を理解してもらい、ティームティーチングでは、実際に教科書を用いてどのように授業に取り入れていくかをキルギス人英語教師と一緒に実践した¹⁴。基本的には、キルギス人英語教師が新しい単語の導入部分や文法項目の説明を担当し、筆者は、それらの習得のためのペア・グループワーク活動を行った。キルギス人英語教師にとって、実際の教科書を用いたティームティーチングは、通常の授業でのペア・グループワークの活動を実践的に体験できるだけでなく、客観的に活動を見てその長所と短所を知ることができる機会になったようである。

¹⁴ 教科書は4技能をバランスよく学ぶためにアクティビティを中心に作られていてコミュニケーション重視になっているが、実際に教科書のペア・グループワークを実践している教師は少ないのが現状である。



ティームティーチング

(5) 授業実践

授業見学や模擬授業、ティームティーチングのサイクルを繰り返し、最終的には、毎回の授業でペア・グループワークの活動を取り入れることを目標に、キルギス人英語教師に授業を実践してもらった。ペア・グループワークの活動を取り入れると、生徒全員が授業に参加するようになり、様々な効果を得ることができた。例えば、文法事項を説明する時に、生徒との対話によって進めたり、教師に英語で質問することが増えたり、生徒がより主体的に授業を受けるようになった。キルギスの生徒は、すでにキルギス語とロシア語の二つの言語を話し、語学を学ぶことに慣れているため、コミュニケーション重視の授業に切り替えることによって、英語を話す時間が自然に増え、今まで以上に英語能力の向上を期待できることを実感した。



授業実践

(6) セミナーの講師として授業実践¹⁵

パイロットスクールプロジェクトの集大成として、各校の英語教師にビシュケク市教育局のセミナーにおいて講師を務めてもらった。キルギスの英語教師が生徒主体のペア・グループワークを題材に模擬授業を実践した。パイロットスクールプロジェクトの目的は、生徒主体のペア・グループワークの活動における情報を共有・発信する場を作ることであ

¹⁵ 2020年3月以降のセミナーは、新型コロナウイルスの影響で中止になってしまい、各校の英語教師がセミナーで講師を務めたのは1回だけであった。

ったが、時間の制約もあり、各学校がプラットフォームになったとは言えないかもしれない。しかし、パイロットスクールプロジェクトを通して、セミナーにおけるキルギス人講師を育成することができたのは大きな成果であった。



セミナーの様子

第4部 キルギスでの活動③：その他の活動

1. 英語教育セミナー

ビシュケク市教育局では、英語教師を対象に1年間に5回ほどのセミナーを開催している。主催は教育局であるが、ビシュケク市内の学校が持ち回りで1つのテーマについてセミナーを企画・運営する。テーマは、アクティブ・ラーニングや言語と文化、パラグラフ・ライティングなど多岐に渡る。また、定期的に新任教師を対象としたセミナーを開催したり、lingua という語学学校と提携して英語教師の研修プログラムを企画・運営したりしている。筆者は、2018年11月のセミナーで活動目標として設定した生徒主体のペア・グループワークについて発表した。その後は、各セミナーのテーマに沿って、発表を行っていた時期もあったが、次第に生徒主体のペア・グループワークの活動を紹介し、キルギスの英語教師からフィードバックをもらう機会として英語教育セミナーを活用するようになった。



英語教育セミナーでの発表

2. スカイプ交流授業

スカイプ授業の目的は、英語教師がスカイプの使い方に慣れること及び生徒たちが共通語としての英語の役割を実感することである。2019年2月4日にキルギスのビシュケク市24番学校と本校の3年生がスカイプを通して交流授業を行った。英語学習の一環として行われ、お互いの生徒が英語で質問し、それに答えるという形で進められた。「キルギスで有名な食べ物は何?」「キルギスに行ったら、おすすめの場所は何?」「日本での人気職業は何?」「日本の高校生は勉強が大変?」などの質問があった。音声聞き取りづらかったなどの反省もあるが、日本とキルギスの生徒たちが一生懸命英語で話そうとする姿を見て、外国の人たちと接することのできる機会を作ることの重要性を改めて実感した。



スカイプ交流授業

3. 英語教育分科会

キルギスでは、青少年活動として英語教育に携わる隊員が増えているという現状があり、隊員間の情報共有及び協同での活動を視野に入れて2019年10月に英語教育分科会を設立した。活動内容としては、キルギスの英語教育における情報交換・共有や各地域でセミナーを開催、隊員間の任地訪問などである。2020年1月にビシュケク市教育局が主催するセミナーに英語教育分科会として参加した。クラスマネジメントがテーマであったこともあり、実際の授業の様子を撮影した映像を見て、それについて意見交換をするワークショップ形式で行った。ワークショップには約80人が参加し、キルギスの英語教師とJICAボランティアがお互いに学び合うとても有意義な経験になった。今後もJICAボランティアが協同してキルギスにおける英語教育の質的向上に貢献していきたいと考える。



セミナーの様子

4. JICA 教師海外研修

JICA では、国際理解教育/開発教育¹⁶に関心のある教員を対象に、開発途上国で国際協力の現場を視察する教師海外研修を実施している。期間は約10日間で、その前後に国内研修も行われる。帰国後には、研修で得た知識や経験を活かして、参加者の勤務校で授業を実践する。2019年12月に北海道の教師8名が首都ビシュケク及びカラコルを訪問した。筆者は、隊員活動の視察ということでビシュケク市内の学校で英語の授業を実践した。また、ビシュケク市内にある TENSAI 学校¹⁷という日本式の教育を取り入れた私立学校にも同行した。TENSAI 学校では、北海道の教師による日本文化交流会が行われた。



授業実践



TENSAI 学校

5. 日本語トーキングクラブ

2018年3月からビシュケクのキルギス国際大学の日本語トーキングクラブで教えることになった。国際大学の2年生を対象に週に1回土曜日に実施してきた。国際大学の言語・地理学部長と日本とキルギスの教育の相違点やキルギスの日本語教育事情について話す機会があり、それをきっかけに日本語を学ぶ学生と交流することになった。基本的には、毎回テーマに沿ったプレゼンテーションや視聴覚教材を使用したアウトプット活動、ゲームなど、日本語を話す環境を作ることを目的に授業を行った。最初はどうなるのか不安もあったが、学生たちはとても熱心に日本語を勉強していて、キルギスの文化や料理などを日本語で説明してくれるため、筆者にとってもキルギスのことを知る良い機会になった。



キルギス国際大学の学生たち

¹⁶ 文部科学省では、国際理解教育、外務省では、開発教育という呼称がそれぞれ使用されている。

¹⁷ キルギスの首都ビシュケクに TENSAI 学校という日本式の教育を取り入れた私立学校が2018年9月に設立された。

6. オリンピアード (Olympiad)

キルギスには、毎年8年生から11年生の生徒が参加し、すべての科目における学力優秀者を決めるオリンピアード(Олимпиада)と呼ばれるコンテストがある。基本的には、各学校での選抜から始まり、地区、市、全国大会という4段階から成り立っている。ビシュケク市では、各学校から2名が地区大会に参加し、その中から各2名(アドバンスレベルとベーシックレベルがある)がビシュケク市大会に進む。ビシュケク市大会の上位者は、全国大会に出場し、各州の代表者と競い、学力優秀者が決定される。また、ビシュケク市では、フランス語やドイツ語、中国語、韓国語などの外国語のオリンピアードも開催している。教育局がこれらのオリンピアードの運営やテスト作成など、部分的に携わっている。



地区大会 開会式



外国語オリンピアード

7. 各種イベントやセミナー

ビシュケク市教育局の仕事の一つとしてイベントやセミナーの企画・運営がある。キルギスには、「教師の日」「男性の日」「女性の日」「キルギス語の日」「チンギス・アイトマートフ生誕の日¹⁸」など多くのお祭りがある。ビシュケク市教育局主催のイベントや式典があるだけでなく、招待客として参加することもある。また、外部機関に委託しているセミナーの受講者の募集や進捗状況の把握も仕事の一つである。2019年9月には、日本のTHT(Teachers Helping Teachers)¹⁹が主催した英語教師を対象としたセミナーに携わった。



キルギス語の日



チンギス・アイトマートフの生誕祭

¹⁸ キルギス出身の最も有名な作家である。「ジャミーリヤ」などいくつかの作品は日本語をはじめ、数か国語に翻訳されている。

¹⁹ THTとは、全国語学教育学会(JALT)の姫路支部のメンバーが創設した団体である。キルギスだけでなく、バングラデシュやラオス、フィリピン、ベトナムなどでも活動をしている。

第5部 帰国時プログラム

1. 帰国時プログラム

JICAでは、任期を終えて帰国したJICAボランティアを対象に帰国時プログラムを実施している。帰国時プログラムの目的は、ボランティア活動の振り返り及びこれからの社会還元のための準備をすることである。プログラム内容は、オリエンテーションや旅券返却、帰国時面談（報告会）、健康診断で2日間の予定で行われる。しかし、2020年3月21日と23日に予定されていた帰国時プログラムは、新型コロナウイルスの影響で中止になった。手続きなどは、すべて郵送などの書類のやり取りで進めることになり、健康診断は帰国後2週間の自宅待機の後に受診することになった。また、JICAは、2020年3月16日に世界66か国で活動しているおよそ1800人の隊員全員を一時的に帰国させることを決めた。筆者の任期に影響はなかったが²⁰、再度、派遣される時期も未定のまま任地を離れざるを得なかった隊員もいるため、複雑な心境で3月20日に日本に帰国した。

2. おわりに

2016年度第17回教員会議（2017年1月11日開催）において、筆者のJICA現職教員特別参加制度を利用した海外研修派遣が決定した。会議資料には、2016年2月、本校の中期計画の中でグローバル化推進のために企画力を備えた指導者養成、長期海外研修への教員派遣を掲げており、「グローバル人材の基盤となる国際感覚とスキルの向上」を目的とした海外研修派遣であると明記されている。以下は、具体的な目標である。

【研修課題：グローバル人材育成の企画・運用能力向上】

- ・PBL型学習、教科教育、各種研修等における企画の開発・実施、管理・運営等の実務能力向上
- ・JICAや関連企業、公共機関とのリレーションシップの確立

途上国における協力隊の活動は、自由に自分の力を試すことのできる環境であった。現状を把握して活動の目標や目標達成のための必要事項を設定し、実際に活動をした成果を分析して次の計画を立案するというサイクルを繰り返してきた。このような途上国での経験を通して、「グローバル人材の基盤となる国際感覚とスキル」とは、異なる価値観を持つ人々がお互いに協力して新しい価値を創造することではないかと感じている。まさに本校の理念である「共育と共創」の重要性を肌で実感できたのかもしれない。今後の展望としては、さらに国内外で研鑽を積み、様々な企画の開発・実施、管理・運営等の実務能力を向上させていきたいと考える。そして、キルギスで培った国際感覚とスキルを生かして、

²⁰ JICAキルギス事務所では3月18日に予定されていた帰国報告会及び隊員総会が中止になった。また、キルギス国内では、一斉休校や集会の禁止、レストランの営業制限などの措置が取られ、3月18日に初の新型コロナウイルス感染者の確認となった。

学校設定科目などのカリキュラム編成に携わるとともに、留学制度を整え、海外の協力協定校を増やし、生徒たちが日常的にグローバルな視点で物事を捉えることのできる高等学校の国際化の実現に貢献できれば幸いである。

最後に、2年間という長期間にもかかわらず、快く送りだしてくれた学校関係者の方々、現地での生活をサポートしてくれた JICA キルギス事務所の方々、活動に協力してくれたビシュケク市教育局の方々、そして一緒に活動を共にしたキルギスの英語教師の方々に、この場を借りてお礼を申し上げたい。